



みんなでつくる 運動会

いよいよ明日は、運動会です。多くの子どもが楽しみにしていると思いますが、中にはこれでやっと毎日の練習から解放されると安堵している子もいることでしょう。いずれにせよ、子どもたちは、これまでよく頑張ったと思います。上手くいってもいかなくても、精いっぱいやったといえる運動会にしてほしいと思います。

これまで本校の運動会は日曜日に実施していましたが、今年から、運動会を土曜日に実施することにしました。日曜日に実施すると、多くの皆さんにお越しいただけるという良さはあるものの、子どもたちにしてみれば、金曜日に最後の練習や準備を終えてから、一日空けての運動会となり、気持ちが高まったのに待ったをかけられたようで、何とも間の悪い感じがするのではないかと思っていたのです。たくさんの方に見ていただきたいのはやまやまですが、やはり運動会の主役である子どもたちのことを考えると、勢いあるままに当日を迎えるのがいいなという思いがありました。ただ、そうした理由で変更したものの、今年はあいにくの天気となりそうです。しかし、予備日を日曜日にしたので、土日のどちらかで開催できればと思っています。

さて、その運動会ですが、コロナ禍以降、全国的に見ても午前のみの実施が多くなったようです。大規模校など学校によっては時間的な制約から、演技の披露をメインに従来の運動会とは違う形で実施しているところもあると聞いています。本校でも児童数が年々増え、徒競走の組数増加や団体演技の2学年実施が難しくなるなど課題が出ていますが、現状に応じた取り組みを考えつつ、できるだけ「運動会」として実施していきたいと思っています。

ちなみに、私が子どものころ通っていた小学校では、運動会と名の付く行事はありませんでした。運動会は、「体育学習発表会」という名前で表現運動などの団体演技と徒競走やリレーのみでした。種目だけを見ると、今の天小の運動会とさして変わらないように思えますが、発表会なので、紅白もなければ得点も優勝旗もありません。徒競走やリレーは走ったら元の列に戻って終わりです。ですから、その後、大阪市の小学校教員になって紅白で勝ち負けを競う運動会の指導



に携わった時には、とてもわくわくした気持ちになりました。そして、学級担任時代は、どうしたら運動会を盛り上げられるかをいつも考えていました。それは、今でも変わりません。去年、全校競技の大玉送りを創立150周年の記念で行いましたが、今年はどうするかを考えた時、「運動会なのに、紅白で対戦する競技がないのはあかんでしょう。」という私の屁理屈を受け入れてもらって、今年も続けることにしました。

また、運動会には、紅白で対抗する以外にもう一つ大事なことがあります。それは、運動会は教職員と子どもたちだけで作るのではなく、保護者の皆さんも一緒に作っていただいているということです。当日 PTA として活動していただいたり、ボランティアとしてお手伝いしていただいたりする保護者の皆さんはもちろん、参観しに来ていただいている方々にも、運動会という景色の一部を担っていただいているのです。ですから、お客様としてお子さんの演技を見るのではなく、一緒になって運動会を作っていただけたらと思います。では、どう作るのかというと、実は簡単です。子どもたちの頑張りに、惜しみない拍手と声援を贈ってください。そしてぜひ、子どもたちに観覧するお手本を見せてあげてください。

子どもたちが勝ち負けを超えて「楽しかった」と思える一日になりますよう、ご協力をよろしくお願いいたします。

み ょ う り 教師冥利につきる話

先日、私が初任校の時に卒業させた教え子が、同窓会を開いてくれました。十数人が集まり、近況を話し合ったり、当時の出来事を語り合ったりと懐かしく素敵な時間を過ごしました。久しぶりに会った教え子は、子と言うより親の世代になりましたが、顔を見ただけで30数年前にタイムスリップしたようにあの頃が蘇よみがえってくるので不思議です。当時私は20代、指導力はまだまだで、その頃書いていた学級通信を読み返すと、ただ情熱だけで子どもたちと向き合っていたような気がします。しかし、教え子たちとの話の中で、私が言ったことすら忘れていた言葉に励まされたと言ってくれる子もいて、微力ではあっても自分が子どもたちの人生に少しでも役に立ったのかなと思うとうれしくなりました。

しかし同時に、教師という仕事は、ものすごく責任の重い仕事だとつくづく思いました。それは、私が、子どもたちに言ったたくさんの言葉の中には、励みになる言葉だけでなく、傷つてしまったり自信をなくさせてしまったりした言葉や指導があったかも知れないからです。(いや多分、いや絶対あったでしょう。)今となってはそれを知ることもできませんが、そう考えることで、これからも自らを律しよう思っています。

最近は、教師のなり手が少ないというニュースが、教員の過重労働などを理由によく言われていますが、しょくう仕事と待遇のバランスだけでなく、仕事とやりがいのバランスはどうなんだろうと感じることが時々あります。しかし、同窓会の後、ある教え子がくれた「本当に藤原先生の生徒でよかったです。」という教師冥利につきる一言が、やっぱりこの仕事はやりがいのある素晴らしいものだと、あらためて感じさせてくれました。

そして帰り道、天王寺小学校で学んだ子どもたちも、大人になった将来、小学校時代の良き思い出を語れるようになるのかなと考えました。もちろん、そうなってほしいですし、となるよう、これからも教職員とともに一生懸命取り組んでいきたいと思いました。

